2024 年 12 月 22 日　説教「インマヌエル」

マタイの福音書 1 章 18～25 節

イザヤにメシヤ誕生の預言がなされてからおよそ 700 年の年月がたちました。主イエスによって招かれ従った弟子マタイによって記されたマタイの福音書にはその冒頭にアブラハムに始まる系図が記されています。その中のダビデという名前が色濃く目に入ってきますが、その後バビロン移住を経験したこの家系は、イエス・キリストのいわば育ての父となった大工ヨセフへとつながっていきます。

１．マリヤとヨセフ（18～19 節）

①聖霊よって身重に（18）**「イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。」**

イエスの誕生の次第は、唯一無ニです。イエスの母の名前はマリヤ。おそらく 10 代の女性でした。福音書には、御言葉を受けて従う、彼女の信仰が記されています。マリヤは誠実で真っすぐな信仰者でした。マリヤの賛歌（マグニフィカート）には、彼女の知性も示されていましたが、一般庶民の女性でありました。そのマリヤには婚約者がいました。ところが、結婚前に身重になるという、尋常ではない事態が生じたのです。彼女は聖霊によって身ごもったのです。その経緯はルカの福音書 1 章に詳しく記されています。

②ヨセフの決心（19）**「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。」**

マリヤの婚約者であったヨセフは苦悩しました。彼は「正しい人であった」とありますが、罪を犯さない人という意味ではありません。神を見上げながら、実直に生きる人であったということです。彼はマリヤを信じていましたが、なんらかの間違いがあって、マリヤは子を宿すことになったとも考えたかもしれません。しかし、ヨセフはマリヤを愛していましたので、社会のさらし者にはしたくなく、静かに離縁しようとしました。

２．御使いの御告げ（20～21 節）

①主の使いが夢に現れ（20）**「彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ。恐れないであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。』」**

ヨセフはこのことで、自分なりにいろいろと思い巡らしていました。そこに、主の使いが夢に現れたのです。「ダビデの子ヨセフよ」。その呼びかたは、彼がダビデの子孫であることが確認です。主の使いのメッセージの内容は、①世間の人々が何を言っても「恐れるな」。②婚約者マリヤと予定通り、結婚せよ。③彼女に子を宿らせたのは聖霊だ、というものでした。それはマリヤが御使いによって告知されたこととほぼ同じでした。とはいえ、人間的には、理解しにくいことであったでしょう。

②罪から救う方（21）**「『マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。』」**

御使いのみ告げは、「マリヤは男の子を産みます」と続きます。かつてイザヤは「ひとりのみどりごが、生まれる」（イザヤ 9:6）と預言しました。今や、男の子の誕生は実現しようとしていたのです。御使いの言葉はさらに具体的でした。「その子の名前はイエスとつけなさい」。「イエス」とは、「主は救い」という意味です。その名前の通り、その方は「ご自分の民を罪から救ってくださる方」となるというのです。人間にとっての最終的な課題は罪です。「罪の支払う報酬は死です」（ローマ6:23）とありますが、そのままでは永遠の死に向かうしかない者たちです。しかし、この方は自らが十字架に上って、人間の罪の罰の身代わりとなってくださいました。この福音を信じ、主の前に出て悔い改める者は救われるのです。

３．預言の成就（22～25 節）

①預言の成就（22）**「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。」**

イエス・キリストの誕生預言は、イザヤ書などに記されていました。ヨセフとマリヤを通して起きている出来事は、すべて預言されていることでした。ここには預言者によって言われたことが成就するためにも、キリスト誕生の出来事はあるのだと伝えられています。つまり、預言の意義の重さを語っているのです。

②処女がみごもっている（23）**「『見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）」**

イザヤ書 7 章 14 節の預言です。それは、第一に処女が身ごもるということ、第二にその処女は男の子を産むということ、第三にその子はインマヌエルと名づけられるということでした。「インマヌエル」はヘブル語です。マタイの福音書はギリシャ語で記されているので、ギリシャ語で読む者たちに、ここにその意味を伝えているのです。マタイの福音書はユダヤ人に向けて書かれています。ユダヤ人は「インマヌエル」の意味はわかりますが、ユダヤ人以外が読むことが想定されているということでありましょう。

③眠りからさめ（24～25）**「ヨセフは眠りからさめ、主の使いが命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。」**

しばらくすると、ヨセフは眠りから目が覚めました。そして語られたことが、主の使いを通して、神が自分に語られたのだと確信しました。そして、その促しに従ったのです。即ち、ヨセフは許婚者のマリヤを妻として迎え入れたのです。しかし、その子が生まれるまでは、彼女を知ることなく過ごしました。そして、その子が生まれると、告げられた通りに、その子の名前をイエスと名づけたのです。

《結論》

クリスマスの出来事の一端をマタイの福音書 1 章から読んでいますが、今朝はこの記事から二つのことを学んでいきたいと思います。

第一は、ここに表された処女降誕をめぐる出来事についてです。ヨセフとマリヤは許婚者でしたが、まだ正式に結婚してはいませんでした。ところがあろうことか、マリヤは身重になったのです。普通ならば、何らかの過ちがあってそのようになったとのだと考えるでしょう。もしそんなことがあったとすれば、申命記 22 章 13～25 節にあるように死刑に処せられるということになってしまいます。マリヤ許婚者のヨセフは正しい人でした。祭司ザカリヤとエリサベツ夫婦が、「神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落ち度なく踏み行っていた」（ルカ 1:6）とありますが、ヨセフもそのように歩む人でした。また、彼は心優しい人で、このことでマリヤを何とか守ろうと思っていたのです。その結果、秘かに離縁して穏便に事をすまそうと考えていました。そこに、御使いがやって来て、マリヤは聖霊によって身籠ったのだから、彼女をそのまま迎え入れなさいというのでした。つまりは、マリヤは処女であるけれど、聖霊によって母となろうとしているということでした。ヨセフはその御告げを信じ、その通りにしたのです。ヨセフの、御言葉をそのままに受け入れる信仰から学びましょう。

第二に、御告げのなかにある、生まれる子供の名前をイエスとせよということについてです。イエスというのは、「主は救い」という意味です。聖なる方が、罪人を救い出すということです。人はすべからく罪人ですが（ローマ3：23）、悔改めて救い主を信じることによって救われるのです。イエスはその救い主としてお生まれくださるというのです。また、ここではその方の存在の意味が「インマヌエル」であったことが示されていました。それはヘブル語では「神がともにおられる」という意味でした。イエス・キリストは生まれた時から、信じる者と共にいて下さる方でした。そして十字架につけられた後に復活して、弟子たちを前にして言われたお言葉のなかでも、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがた共にいます」と約束してくださいました。そのご存在の根本は「御臨在くださる方」であったのです。

今から 20 年ほど前に、夫婦で北海道に行ったことがありました。ある湿原の木道を、ナナカマドなどをながめながら、歩いていました。足を踏みしめるたびに、コト、コトという音がします。その時に、非常に強く主の御臨在を感じ、深い平安を味わいました。主は生きておられるということを実感する一時でした。主は生きて私たちとともにいて下さる方と思いました（詩篇 139 篇）。

クリスマスは、私たちと共にいてくださる方がお生まれくださった、恵みの時です。であれば、私たちにとって、クリスマスを過ごすのに最も大切なことは、この方がともにいて下さることを覚えつつ、救い主を賛美し、この方を覚えて祈っていくことでありましょう。また、自分の罪に悩んでいる方は、この方の前にその罪を告白して、赦しをいただいて、真の平安をいただく時でもありましょう。

この方を真に覚える時に、私たちは「クリスマスおめでとうございます。」と伝え合うことになるのです。 メリークリスマス!p